

キリスト道講演会

試練の中での希望(一)

2011年5月22日(東京 新宿)
奥田 昌道

日本人全体に課された宿題 弥陀の本願 キリストの十字架 神のみ思いは何か 「汝等しずまりて我の神たるを知れ」へりくだりの砕けの心 自然界の中の呻き キリストの霊が宿っている万人を救済しようとの願い ゲッセマネの祈り 本ものの生命 「信なき我をあわれみたまえ」 「キリストさま、私の中に宿ってください」 「私と一緒にあの光の国へ行かないか」 「なんじ、今日、われと共にパラダイス」 永遠の生命 信仰・希望・愛 キリストに身をゆだねて進む 試練と逃れの道 原動力は聖霊という霊 生の喜びと、興奮をとまわらない熱情 おかすべからざる権威 心の平安 「私は何もできない。何も知らない」 「それでも私は、今日、私のリン」の苗木を植える 「やがて死ぬ気色も見えず蟬の声」 愛に根差した生き方 根源的基盤は何か 「なんじ、一つを欠く」 祈り

●日本人全体に課された宿題

皆さまのお手許に配られていますプリントは、NHKの収録(2011年6月5日放送NHKラジオ「宗教の時間」を前提にして、30分の放送時間だったので、25分くらい私が一方的にしゃべるものだと思いきや、それでこんなものを作った。ところが、実際に金光寿朗さんという方が——前にラジオ深夜便の「このころの時代」をやってくくださった方で、3年ぶりですけれども——おいでになりました、対談形式になってしまったんですね。だから、私が用意していたものとは違う形で進みました。

しかし、私は心をこめてこれを作ったんです。それをベースにして、少し修正はしてますけれども、これを書きあげました。始めの方を読んでみます。

《はじめに、この度の大地震災の犠牲となられた方々に対しまして、心よりお悼み申し上げますとともに、被災された方々におかれましては、さまざまの困難に打ち勝つて、生き抜いてくださいますよう、神のご加護とご平安を、心からお祈り申し上げます。》

1. この度の大地震災によつて、それまで宮々と築き上げてきたものが、すべて、一瞬のうちに失われてしまった。尊い多数の命が失われ、土地も住まいも、その他さまざまの価値あるものが廃墟に化した。》

これは、クリスチャンであろうとなかろうと、我々日本人全体に課された宿題ではなからうかと思うんです。

即ち、関東大震災がありました。それから、戦争で、66年前になりますけれども、昭和20年、東京も焼け野原になりました。それから、広島、長崎の原子爆弾です。大阪とか、大都市



はほとんど焼け野原の状態でした。そこから立ち上がったわけですが、それから後もしばしば、大地震だとか、台風だとかいったものによる自然災害で日本は苦しんできました。特に地震というのは大変な被害をもたらします。

それが繰り返されたのちに今度は——人は「想定外、想定外」と言っていましたけれども、神さまの前に想定外なんてあったものじゃないですね——もう黙示録をみましても、キリストの預言をみましても、

「とんでもないことが起こる」

ということをちゃんとおの時代の時代に仰っているんです。いつどんなふうな形でということはおわかりません。けれども、

「常に絶えず目を覚まして祈っておれ」

ということはおっしゃっています。

「平和だ無事だと言っているときに、思わぬときに人の子はやって来る」

と。「人の子がやって来る」という言い方でなさっているけれども、それは

「何が起こるか分からない」

という、そういうことだと私は思う。

日本人は美しい自然に囲まれて、四季折々、自然はときにはそういう凶暴な牙をむき出すけれども、全体として柔らかいですから、

「自然に抱かれ、その中に安らつて、自分たちはそれでいい。そんなキリスト教みたいなのは激しいのはむしろにはかなわん。せいぜい、仏教くらいがちょうどいいのではないか」

なんて普通は思う。

「人生はいろいろ苦労があるが、しかし、それを明らかな目をもって人生とはこういうものだということを知つて、そういう我執を離れて誠実な生き方をすれば、

それでいいじゃないか。来世のことなんか考えなくてよろしい」

というのが本来の仏教だと思えます。

●弥陀の本願

法然、親鸞さんにおいては、更に向こうの世界ということが示されました。仏教というのは万巻の書があるでしょ。そのどれをとってやるかによってずいぶん違うそうです。ところが、本然さんは中国の善導というお坊さんが発見したものにしがみついた。というのは、法然さんはどんなに自分が修業しても、やはり本当の平安が得られない。でも、

「南無阿弥陀仏を称えるだけでいい」

という、善導の教えにとびついた。しかも、法然さんはあらゆる学問を積んでおられますから、当時の高僧たちが法然のところへやって来て問答を、教理問答をやるわけです。全



然ゆるがないんです。批判的な目で集まってきて、法然さんをやつつけようと思っていた高野山だとかいろいろな宗派のお坊さんは、

「やはり、法然さんの言うことの方が本当かな」

なんて、だんだん変わりだしたという。だから、非常に理路整然と説いたんです。ただ、法然さんは専修念仏ですから、百万回でも一日中称えていないと気が済まないということになりまして、今度は念仏行になってしまった。それを親鸞は少し簡略化して、

「弥陀の本願によって救われる」

という。それでも、百万回念仏道場なんてありますように、やはり念仏を称えることが大事なんです。それが一遍上人になりますと、

「もう称えなくても救われているんだから大丈夫だ」

という、そんなふうになんだん、

「本願の力がすごいから人間の側で何かするということには要らない」

という、そこへ変わっていったようです。人によれば、

「そういう弥陀の本願というのは、人間がそういうイメージを向こうの世界に作っ

たんだらう」

と言うかもしれませんけれども。

●キリストの十字架

キリストという方は、本当に自分がそこから来られて、またそこへ帰られたんです。かぐや姫がお月さんからやって来きてまたお月さんへ帰っていくように、キリストは神さまのもとから遣わされてきて——しかも、自分の意志じゃないんです——父なる神の御意だけを行じていく。己が意志というものを捨てておられるでしょ。

だから、私はあのキリストの十字架というものは大変なものだと思う。あれはイジメですよ、親が子どもをあんなに酷い目にあわせるんですもの。子どもは子どもで、

「父の御意なるがゆえに」

と言って、それを貫くんではしょ。こんな凄い話はないと私は思う。

それは誰のためか。衆生みんなの救いのためなんです。衆生みんなの救いという、その衆生の中には、私も皆さんも、それから、私はこの度犠牲になった人も全部含まれていると思う。これが私の考え方なんです。

今日のプリントにもその次のところに、

「私たちは、何を抛り所として、何をめざして、新しく歩み出せばよいのか。また、

犠牲となった人(命を失った人)のことを、どのように受け止めればよいのか。

と。クリスチャンがよく思いますのは、

「なんで、こんなことが起こったんだらう。これは神の審判なのか」



と。ある人は「天罰」と仰いましたね。そんなふうには、「なんで？」ということをするすぐ考えらるんです。キリストの時代にも、生まれながらの目の見えない人が路傍で乞食をしていた。弟子たちは、

「この人の罪ですか、親の罪ですか」と聞きました。キリストは、

「この人の罪でもなければ、親の罪でもない。神の栄光がこの人の上に現れるため、神の御業が現れるためである」と仰いました。

●神のみ思いは何か

ここに2番目に私が書いたのは、

《2. この度の大地震災、それによる多大の犠牲についての神のみ思いは何か。

この点については、私は、人間の側から、「神のみ心」を推し量ることはすべきではない、と考える。

ただ、言えることは、私たち生き残った者、犠牲を免れた者は、尊い犠牲を無駄にしてはならない、ということ。

これまでの生き方を反省して、特に心の面、内面の生き方において、何を最も大切にして生きるべきかの問題に、真剣に取り組まなければならない、と思う。

3. 地上の生活において、営々と築き上げてきたもの、財産や地位、名誉、その他、この世の人が追い求めてきたものは、決して永遠のものではなく、いつかは失われるもの、それぞれどこか、いつ、瞬間に失われるかも知らない不安定なものであること、人の命さえも、そうであることを自覚しなければならない。

では、何を求めて生きるべきなのか。何が起ころうとも大丈夫、というようなものが、この人の世にあるのか。

4. 人は、死んでしまえば、すべて、おしまいなのか。

断じて、そうではない。人間には肉体の死を超えて存続する「霊」が宿っている。人間は本来、霊的存在なのである。『大言海』という辞典の「ひと」を引けば、人を「霊止」（霊が止まる）と表し、「霊ノ止マル所ノ意カト云フ」と解説してある。

そして、「霊」を引けば「神ノ霊ヲ称スル語」と解説してある。したがって、人とは「神霊の止まる存在」だということになる。

キリストは、「復活」という事実をもって、肉体の死をもって終らない命、「永遠の生命」を顕した。》

だから、本来、人間というのは、「からだが無くなれば、それで一切が無に帰する」という、そんな安っぽい存在ではなくて、本来は「神の霊が宿る存在」ということなんです。キリ



ストご自身は復活という事実をもってそれを現してください。

●「汝等しずまりて我の神たるを知れ」

ここでちよつと、聖書の中からいくつかこれに関わりを持つようなところを開いてみたいと思います。

詩篇46篇というのはルターが愛読した詩篇なんですけれども、凄いことが書いてあります。まず、文語で読んでみます。

「神はわれらの避所^{まげところ}また力なり、なやめるとき^{いと}の最^{たすけ}ちかき助なり。²さればたとい地はかわり山はうみの中央^{もなか}にうつるとも我儕^{われら}はおそれじ。³よしその水はなりとどろきてさわぐとも、その溢れきたるによりて山はゆるぐとも何か

あらん。」(詩篇46・1〜3)

こんなのは普通、詩、ポエムだと思うでしょ、美しい文学だと。

「たとい地はかわり山はうみの中央^{もなか}にうつる」

なんて、そんなことはありえないというふうに普通は考えます。それから、

「水はなりとどろきてさわぐとも、その溢れきたるによりて山はゆるぐとも」

という、そんなことがあるものかと。しかしながら、こないだの大津波なんてまさにそうです。何十メートルという凄い波が一拳にしてこの地を覆ってしまったという、そういうことが現実にあったんですから。この詩篇46篇も単にイメージで創^{つく}ったのではなくて、やはりこういうことがありうるという思いで創^{つく}ったのではないかという気がいたしました。

ところが、4節に、

「4河あり、そのながれは神のみやこをよろこばしめ^{いとたかきもの}至上者^{いとたかきもの}のすみたまう聖所をよろこばしむ。⁵神そのなかにいませば都はうごかじ、神は朝つとにこれを助けたまわん。⁶もろもろの民はさわぎたち、もろもろの国はうごきたり。神その声をいだしたまえば地はやがてとけぬ。」(詩篇46・4〜6)

と。メルトダウンなんです。でも、神さまがいらつしゃればびくともしない。

「7万軍のエホバはわれらともなり。ヤコブの神はわれらのたかき櫓^{やぐら}なり。……¹⁰汝等しずまりて我の神たるをしれ。われはもろもろの国のうちに崇められ、全地にあがめらるべし。¹¹万軍のエホバはわれらと憐^{あはれ}なり。ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり。」(詩篇46・7〜11)

と。まあ、イスラエル中心ですから、こんな歌い方をしますけれども、やはり、

「汝等しずまりて我の神たるを知れ」

というのは、これはなにもイスラエルにかぎりません。地球に住んでいるものすべての人々に対して、

「人間は万能じゃない、人間の科学は万能じゃない。やはり、神の前に畏れの心を



持たなければ、人間が主人公になったら危ない」ということをこういうところでも既に謳われているのではないかと思います。

●へりくだりの砕けの心

そういう角度から旧約聖書をいろいろ読みますと、思い当たることがものすごくある。たとえば、イザヤ書40章のところを見てください。私は、新共同訳よりも口語訳聖書(新約は1954年改訳、旧約は1955年改訳)の方がぴったりにきますので、それでお読みします。

「³呼ばれる者の声がする、『荒野に主の道を備え、さばくに我々の神のために、大路をまつすぐにせよ。⁴もろもろの谷は高くせられ、もろもろの山と丘とは低くせられ、高低のある地は平らになり、険しい所は平地となる。⁵こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともにこれを見る。これは主の口が語られたのである。』⁶声が聞こえる、『呼ばわれ』。わたしは言った、『何と呼びわりましたか?』。人はみな草だ。その麗しさは、すべて野の花のようだ。⁷主の息がその上に吹けば、草は枯れ、花はしぼむ。たしかに人は草だ。⁸草は枯れ、花はしぼむ。しかし、我々の神の言葉はとこしえに変えることはない。』

これはペテロ前書に引用されていますが、それからしばらくいきみますと、

¹²だが、たなごころをもって海をはかり、指を伸ばして天をはかり、地のちりを枘ますに盛り、てんびんをもって、もろもろの山をはかり、はかりをもって、もろもろの丘をはかったか。¹³だが、主の霊を導き、その相談役となって主を教えたか。

云々とありまして、要するに人間というのはいかにちっぽけかということが次に出てくるんです。

¹⁵見よ、もろもろの国民は、おけの一しずくのように、はかりの上のちりのように思われる。見よ、主は鳥々を、ほこりのようにあげられる。¹⁶レバノンは、たぎぎに足りない、またその獣は燔祭はんさいに足りない。¹⁷主のみ前にはもろもろの国民は無きにひとしい。彼らは主によって、無きもののように、むなしもこのように思われる。¹⁸それで、あなたがたは神をだれとくらべ、どんな像と比較しようとするのか。」(イザヤ40:3~18)

なんて書かれている。こういうのを讀むと、普通は怒るんですね。

「神さまは我々を何と思っているのか。なめているのか」と言いたくなるでしょうけれども。

こないだのようなことがありますと、やはり、神さまというのは超絶の世界にいらつしゃって、地球というのは神さまから見たら、本当に吹けば飛ぶような存在なんですね。本当にそういうちっぽけな存在です。だから、そういうちっぽけな人間は、敬虔なる心、



平伏しの心、へりくだりの心、砕けの心、これが大事なんです。そういう、へりくだりの砕けの心を持つている者を神さまは祝福したくて祝福したくてしようがない。ところが、「俺は」と言つて、神になりかわるような思い上がり、それはやはり審判さばきを受ける。このように思わざるをえないんです。

●自然界の中の呻き

それからもう一か所、ローマ書8章のところですよ。18節から読みますと、

「¹⁸われ思うに、今の時の苦難くるしみは、われらの上に顕あらわれんとする栄光にくらぶるに足らず。¹⁹それ造られたる者は切に慕あこがいて神の子たちの現れんことを待つ。

²⁰造られたるものの虚無むなしきに服せしは、己わがが願ねがいによるにあらず、服せしめ給たまひし者によるなり。²¹然れどなお造られたる者にも滅亡めつじやうの僕たる状さまより解かれて、神の子たちの光栄の自由に入る望みは存ぞんず。²²我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。」(ロマ8・18、21)

と。キリストは自然界というものを見たときに、

「ソロモンの栄華もあの野の花の一つにも及ばなかった」

と仰いましたけれども、パウロは決して自然をただ美しいものとは見てない。そこに呻きを感じています。やはり、弱肉強食とか、いろんなそういう自然災害とかも見たでしょうし、自然界の中に呻きというものを感じている。それはまず、神の子たちが、人間が本当に神の心を心として生まれ変わったならば、自然界も共に救われる。人間が墮落しているかぎり、自然界は救われないという思いを抱かかっていたんだと思います。ですから、

「すべて被造物が虚無に服しているのは、自分の願ねがいによるのではない。服せしめ給たまひし者、神さまによるんだ。しかしながら、被造物にとつてもそういう滅亡の僕たる姿から解き放たれて、神の子たちの光栄の自由に入る望みは残っている。我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。」

と。いや、そういった自然万物だけではなく、

「²³しか、然しかのみならず、御霊みたまの初はじめの実をもつ我らも

聖霊をいただいた私たちも、霊はいただいたけれども、身体は依然として罪の身体だ、身体は死の身体だと。だから、

自らの心のうちに嘆なげきて子とせられんこと、

本当の意味の子どもです、

即ちおのが体の贖あがなわれんことを待つなり。

霊体が与えられる。キリストの復活体のような、ああいう霊体の姿に変貌する、その時を待っていると言いう。



24 我らはこの望のぞみによりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争いてなお望まんや。25 我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。」

と。将来というものがパウロにとつては希望なんです。それは本当の意味の贖いの完成という希望です。今は分裂状態なんです。霊は救われてあるけれども、身体はなお苦しんでいるという。

●キリストの霊が宿っている

そのことがその手前のところにも出てくるんです。肉の思いの中に囚われているあいだは、人は不自由である、死である。「肉の思い」というのは自己中心——神さまをけとばして、自分の天下をつくりあげようというのが人間の思いなんです——思ひ上がりです。そういう肉の思いでおるかぎりには、神さまは喜びたまわらない。キリストの霊というのはどこまでも、へりくだりの霊ですから、

「肉におる者は神を喜ばすことができない。しかしながら、神の霊、神の御霊がある。なた方の中に宿っていらつしやるんだから、あなた方はもはや肉の人ではない、霊の人だよ」

と、はつきり断言している。大体、キリストの霊を持ってない者はクリスチャンではない。

「クリスチャンとはだれ？」

「キリストの霊が宿っている人よ」

と。はつきりしてるんです。

「私はクリスチャンです」

と言いながら、

「いや、私はキリストの霊が宿っているかどうかかわからんです」

なんて、それは自己欺瞞です。自分で感じる感じないではない。

「私は宿る」

とキリストが宣言されたら、宿られるんです。こつちの思いではない。キリストは「宿る」と仰れば、宿ってくださいるんです。

キリストは何のために苦しまれたんですか。私たちを神の子にするためでしょ。「神の子」というのは、神の霊をいただいたのが「神の子」ですよ。そして将来、輝くわけですよ。苦しんでいる我々を本当の神の似姿に変えるために、回復させるためにキリストはあんなに苦しんでくださって、そして、天にのぼって、聖霊という姿で我々の中にくだつてきてくださるんですよ。



●万人を救済しようとの願い

それから、ついでに言っておきますが、このプリントにも出てくるけれども、ペテロ書のところに、キリストが十字架にかかって三日目に——まあ、実質、一日半くらいでしょうか、あしかけ三日ですから、一日半くらいでしょうけれども。とにかくキリストは十字架で死なれた——復活体となって、霊体となって現れるまでの一日か一日半くらいのあいだに何しておられたか。地獄へ下って行かれたんです。

「そこで苦しんでいる霊たちを救い上げた」

とペテロ書に書いてある。その苦しんでいる霊というのは誰かということ、昔、ノアの時代に神さまが、

「お前たちは悔い改めろ。そのうちに大洪水がやってきて、この地上はもう滅ぼされてしまうから」

と仰つたのに従わなかった人たちのことです。神さまはまず、ノアに対して、

「さあ、方舟はこぶねを造れ」

と。でつかいでつかい方舟を、それも山のとつぺんに造れと言われた。ノアは、

「はい」

と言つて、くる日もくる日も一人でその舟を造つたんです。みんなは、

「あいつはバカだ。こんなお天気続きの日に山の上で木の舟を造っているバカ者が」

とあざ笑つた。くる日もくる日もそれをやっていたでしょ。ところが、やがて大洪水がやってくる。四十日四十夜、雨が降り続いて、そして山の頂きまで水が達した。ノアとその家族たち、それからそれぞれの種類の動物たちがそこへ入りこんで、そして、舟がプカプカ浮きだして、他のものは全部滅びたということが書いてある。

このプリントでいいますと、

《キリストが十字架の上で死なれた後、復活の命として地上に姿を現されるまでの間、黄泉よみの国において捕らわれている霊たちのところへ下って行き、その霊たちに救いをのべ伝えられた、と。

そういうふうなペテロの第一の手紙に書いてある。

そして、これらの霊たちというのは、むかし、ノアの箱舟が造られていた間、神が寛容をもつて待つておられたのに従わなかった者どものことである、と。そういうふうにペテロ書は言っている。

ノアの箱舟のことは、旧約聖書の冒頭の「創世記」の第6章から第9章にかけて出てくるが、その時代に、

非常に悪がはびこっていて、それで、神さまはもう愛想をつかしたんです。

神は、「人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪いことばかりであるのを見られ」、「地の上に人を造つたのを悔いて、心を痛め」た、



と記しるされている。それで、四十日四十夜降り続いた大雨による洪水によって、ノアの家族以外の人間がことごとく滅んだという。

ペテロの手紙では、十字架上での死を味わったキリストは、復活体として地上にすがたを現されるまでの間に、地獄にまで下って、そこで苦しんでいる霊たちに宣教された、即ち、救いの手を差し伸べられた、という。

これは、何もノアの時代の人々のことだけではなく、今日に至るまで、救いを必要とするすべての霊たちについて当てはまることだと、私は解している。万人を救済しようとの願いをお持ちのキリストならば、そうであるに違いないと私は確信している。》

と。これは私の確信です。

●ゲッセマネの祈り

ですから、その前のところに、

《5. 犠牲となって命を失った人はどうなるのか。

私は、この度の大震災のことで、一番心を痛めておられるのは、天界におられるキリストご自身ではないかと思っている。

最も深く、苦しみ・痛み・悲しみを背負っておられるのは、キリストご自身。

そして、ご自分の十字架上の死をもって、逆に死を滅ぼし、永遠の生命を実証されたキリストは、今、我々一人ひとりのもとに、いつでも、どんなときにも、寄り添ってくださる霊的存在のお方である。》

これは絶対にそうです。

「私なんかキリストが宿ってくれるはずがない」

と、皆さんが言うのは勝手な思い込みなんです。そう思い込むのは、キリストは無駄死にされたということでしょう。

キリストは、なにも十字架で死ぬような罪も犯してないし、何ひとつそういう理由がないんです。全く理由がない。ただ神さまが、

「お前は十字架にかかって、人の罪を背負え」

と、無茶苦茶なことを突きつけられた。私ならけとばしますね、

「それはないでしょう。なんで、そんな理不尽なことが通るんですか。あなたは義の神さまでしょ」

「そうだ、私は義の神だけど、義を貫いたら、みんな滅びてしまう。ノアのあの当時の人々といっしょで。本当の神の審きが臨んだら、みんな滅びてしまう。それに耐えられない。頼むけれども、お前が代わりに死んでやってくれ」

と。これが神さまの無茶苦茶な要求でしょ。それに対してキリストは、



「はい」
と。これがあのゲッセマネの祈りですよ。

キリストにとつて祈りとは楽しかったはずなんです。神さまと一つになるんですから。我々みたいな、どこまでが霊でどこからが肉なのかわからないようなお弟子さんたちと一緒にいて、キリストは孤独です。本当にキリストの心を心とすることができないご連中ですよ、あの周りにいたのはね。一人で山にこもつて祈つたりしておられる。ときには、夜を徹して祈られる。それはキリストには楽しい祈りだったんですよ。

ところが、ゲッセマネの祈りは全然違います。
「したたり落ちる汗は血の滴のごとし。天使が現れて背中をさすつた」と——さすつたとは書いてないけれども——力づけたと書いてある。いよいよ苦しんで祈られた。

「なんで、この十字架があなたの御意なのか。本当にそれが御意なのでしょう
か」
「なんで、この十字架があなたの御意なのか。本当にそれが御意なのでしょう」ということをとことん問われたと、私は思うんです。全く理不尽でしょ。

「でも、わが思いではなく、どうぞ、あなたの御意をなしてください」
と三度祈つて、二度ともお答えがこないものですから、決然として立ち上がつて——弟子たちは眠りかけていた。キリストは大声で祈つたりなさつたから、寝ている弟子たちの耳にも聞こえていたのでしょう——

「さあ、起きろ。もういいから」
と言つて、決然と十字架に向かわれたでしょ。

●本ものの生命

それは何のためか。我々一人ひとりを本当の神の子にするためです。

「何がきても滅びない」
地震だろうが、津波だろうが、原子力であろうが、身体がふつ飛ばされようが、そんなものでびくともしない、

本ものの生命をお前たちにあげる」

と。それはキリストの復活の生命ですから。キリストははっきりと弟子たちにも仰つた。

「身体を殺すことができても、魂に手を触れることのできないものたちを恐れるな」

と。まずは人間どもです。弟子たちを伝道に遣わされるときに、弟子たちは恐いわけです。それに対して、

「身体を殺すことができても、魂に手を触れることのできないものたちを恐れるな。本当の恐ろしい方というのは、身体を殺したのち、魂までもゲヘナ(地



獄)の火に投げ入れる、そういう権威をお持ちの方、この方を恐れるんだ」と。そう仰つてから、

「二羽のすずめは一アサリオンで売られているではないか。でも、父のお許し
がなければ、一羽のすずめも地に落ちない。あなた方の髪の毛までもみな数
えられている。あなた方は素晴らしい存在だから、心配するな」ということを仰つた。

それからまた、あの「山上の垂訓」といわれる中でも語られています。

「たとえ、人は全世界をもうけても、己が命を損したら何の益があるうか」と。十字架のことを予告なさるところですね。山上の変貌をとげられたあとです。

「私に従ってきたと思う人は己を捨て、己が命を捨てる覚悟で私の弟子になつてきなさい。自分の命を救おうとしがみつく者は結局、それを失う。しかし、私のため、福音のために命を犠牲に供する、その覚悟のある者は永遠の生命を得るのだ。人その全世界をもうけても、己が命を損する者は

ということ、天国に行けなければ、

何の得になるのか」

ということも言われた。とにかく、キリストの仰つていることは、我々は地上の命を持っているけれども、これは永遠のものでないし、それをいつまでも保障するものでもない。そういう地上の身体、命の中に天上の生命を宿す。それを失っているのが我々罪びとの姿、失われたる人間ですから。

「それをもう一度、神霊の止まる存在、神の霊が止まって、死を突破して向こうで輝く、そういう神の子に一人ひとり成らせて

仏教徒であろうが何であろうが、そんなことはどうでもいい、

私の本ものの生命を欲しいと言う者にはみんな上げたいのだ」という。

●「信なき我をあわれみたまえ」

「望むものをさしあげたい」

というのが、キリストなんです。要らん人には、これはキリストは遠慮深いですから、押しつけなさいません。まあ、押しつけの宗教がたくさんあるので困りますけれども。

キリストは、福音書でもそうでしょ、

「何をして欲しいか」

と聞いておられるんです。

「はい、目が見えるようにして欲しいんです」

「わかった」



と言って、目を見えるようにされた。

「何してほしいのか」

「はい、これこれです」

「よし、信ずるとおりになれ」

と仰ったでしょ。

癲癩てんかんの子どもをかかえて苦しんでいた親父さんの話があります。キリストは山上で変貌して、山を降りてこられたときに、残った弟子どもが——山へ行つたのは三人です、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れて山へ行かれた。そこで変貌されました。モーゼとエリヤが現れて、どういう死に方をなさるか、つまり、この世を脱出して天に上られることを話し合っていた。ペテロはもう、うわの空で、

「ここに小屋を二つ造りましょう。一つはモーゼのため、一つはエリヤのため、

一つはあなたのために」

とか言つて、うわ言を言つていた。すると、雲おほが覆つてきて、

「お前たちはこのお方に聞け。これはわが愛する子だ」

という声があつて、モーゼもエリヤも見えなくなったという話がつているでしょ。それから山を下りてこられたら——残りの弟子たちが群衆と大騒ぎなんです。何でかというところ、

「この息子が、

今でいえば癲癩てんかんです。

引きつけを起こして泡を吹いてのたうちまわつて、死んだような状態になる。

弟子たちに、助けて欲しいと頼んだけれども、全然ききめがなかった」

と、親父さんが言う場面が出てくる。キリストは、

「ああ、困ったことだ。いつまで私はこの世におれるんだろうか」

と。その親父さんは、

「もし、あなたにお出来になるのならば、この子を癒いやしていただきたいんです」

と。キリストは、

「『もし』なんて条件をつけるな。信ずる者にはすべてができる」

と、はつきり仰った。そしたら、その親父は、

「信なき我をあわれみたまえ」

と、もう平伏したんですよ。

「はい、信じます。信仰なんて私はありません。助けてください」

と言つて、そこで平伏した。そして、キリストは言葉でもつてその霊を追い出して、子どもは一時仮死状態になったけれども、すぐ起き上がったというような話が出てきます。あとで弟子たちが、

「なぜ、私たちはだめだったんですか」



と聞いたら、

「このたぐいは祈りによらなければだめだ」

とかキリストが言われたというのがあるけれども。

まあ、そんなふうには、キリストは、ああやって十字架におかかりになって、自分を犠牲に供されたというのは、我々一人ひとりを本当に神の子にするためです。

「キリストさま、私の中に宿ってください」

さっきのローマ書のところにも、

「神の御霊みたまがあなた方のうちに宿っていらっしゃる以上は、あなた方は靈的存在である。キリストの霊をいただいていない者はキリスト者ではない。キリストの霊が宿っておられるならば、たとえ肉体はもとの罪のために死んでも、

これはしようがない、人間はアダムの裔すえですから必ず死ぬんです。それは仏教だってみな一緒です。人間はみな死ぬんですもの、しようがない。そこで諦めるか、あきら「そんなもんじゃない」と思うかですよ。神さまの方は、

「そんなものじゃない。お前たちはそんな安っぽいものではない」と、はっきり宣言されておられる。

キリストの霊が宿っているなら、身体からだはたとえ罪で死んだような状態でも、

霊は命の中にある。」

と。それだけじゃない。

「キリストの霊が宿しているならば、その御霊みたまゆえにあなた方の死ぬべき身体をも生かしてくださいよ」

と。これはありがたいですよ。本来、死ぬべき身体なんですから、それを

「少々のことがあったって突破していくよ」

と。まあ、どうせ死にますけれども。でも、とにかく、身体まで生かされるよと。それだけの生命力が、御霊にはあるんです。

この御霊という方が一人ひとりの中に宿っていて、天国へと連れて行ってくださるわけですよ。地上にあつてはどうかというのと、さっきありましたように、呻うないている。しかし、必ずそうやって霊体を与えられる。キリストのあのお姿と同じ姿に変えられていく。そういう望みを与えられている。そして、忍耐をもってその時を待っている。しかも、

「御霊みたま自身*ご自身*が我々のために執り成して祈ってください」
と書いてある。

「われらはいかに祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き呻きをもて執り成したもう」

と。ありがたいです。御霊という方がそうやって、



「御霊、来てください。お願いします」
 という人間に対しては、誰にでも来てくださる。

「私は信者ではありません」
 とか、信者であろうがなかるうが、そんなことは関係ないですよ。一体、信者とはなに？
 「キリストを欲しい」

と言ったのが信者ではないですか。
 「キリストをください。キリストさま、私の中に宿ってください！」
 と言えば、

「オーケー！」
 と、宿られた瞬間にもう信者ですよ。そうじゃありませんか。それ以外の信者の定義を教えてください。洗礼を受けた人なんですか。何なんですか、一体、キリスト信者って。

キリストがすべてなんです。キリストというお方が我々を粉碎してしまって、古い我々を粉碎してしまって、もう十字架の上で粉碎してくださったんですよ。どんな頑かたくな人間も全部、十字架の上で砕かれてしまっているんですもの。神さまの目から見たらですよ。神さまの目から見たら、どんな頑かたくな人間も十字架の上でキリストと一緒に粉碎されて、もういないんですよ。そして、新しく復活させてくださるといふキリストと一緒に復活してくださいっているんですよ。エペソ書にそう書いてあります。ペテロも、

「そういう苦しんでいる霊たちのところへ行って、その霊たちを救い上げた」と書いていますでしょ。

だから、現代の人間も——いわゆるクリスチャンであろうがなかるうが、そういう外側でなくて——救い上げてくださる。

「私は御霊をいただいたクリスチャンです」

なんて、自覚は何もありません。ないけれども、キリストが、

「私は宿る」

と仰ったから、そして、私は拒絶してないから、そしたら、いらっしやるんです。

●「私と一緒にあの光の国へ行かないか」

ヨハネ伝14章にあるでしょ。

「私は、ところを備えに行く」

「どこへいらっしやるんですか」

「父の御許みもとへ行く。あなた方に住まいを用意しに行ってくる。住まいの用意ができ

たら、また帰ってくる」

と。何のためにか。

「あなた方と一緒に居おりたいからだ」



と、ヨハネ伝14章に書いてある。

「あなた方といつも一緒に居りたい。いつもベツタリ一緒に居りたい」と。「そんなベツタリさんは嫌や」と言う人はしょうがないですよ(笑)。

愛というのはやはり、

「一つでありたい」

というのが愛です、本来の姿は。二つが一つになるというのが愛の姿でしょ。キリストは我々くんだりない人間と常に一つになりたいんです。何十億人いようと、一つになりたい。一人の肉体のキリストは無理ですわ。霊のキリストは、それこそ太陽光線みたいに——太陽光線は地球上にいるどなたにも届いてますよ、ちゃんと。黒いものに虫眼鏡を当てたらこげますものね。ビームが来ていますわけです——そのように聖霊という姿のキリストさまはどなたにもすぐおいでになるわけです。光は一秒間で地球を7回半回ると、私は子どもの頃に聞いた。聖霊はもつと速いかもしれない。

だから、私は言いたい。犠牲になった人たち、その人たちの所へも聖霊のキリストは行かれて、

「苦しかったね、大丈夫だよ、私が来たんだから。あなたは今まで私のことを知らなかったかもしれない。けれども、私はこういう人間だ」

と。まあ、身分証明書をお示しになるかどうか知りませんがそれでも。

「私はこういう者なんだ。光輝いているから、ちょっとまぶしすぎるかもしれないけれども、すぐに慣れるよ。私と一緒にあの光の国へ行かないか」

と言われる。

「いや、私、光は嫌いなんだ。私は闇が好きなんだ」

と言つてたらだめだと。これはヨハネ伝に書いてありますね。

「神はその独り子を賜ったほどに世を愛してください。信ずる者の一人も滅びずして永遠の生命を得るためである。神が御子を遣わしたのは世を審くためではなく、救うためである。審きとは何か。光が来たのに、人はその行いが悪いので

いや、私は「根性が悪いので」と言いたい。

光よりも闇を愛した。そして、光に背を向けて闇を選んでいった。これが審きである」

と、ちゃんと書いてあるんです。

「真理まことを行う人は光にやつてくる」

と書いてある。

愛の光ですから、愛に飢えている人はその光が慕わしいにちがいない。今まで知らなかっただけ、今まで閉ざされていただけです。だから、ギリギリのところまで心を開けば、その



キリストの霊は直ちにその者をだっこして、天界へ連れて行かれると思う。

●「なんじ、今日、われと共に。パラダイス」

それは、十字架の上の片一方の盗賊が——もう一方の盗賊はさんざんキリストをなじっていたでしょ。そうしたら——片一方の盗賊が、

「お前は慎めよ。俺たちはさんざん悪いことをしたのだから、十字架は当た

り前のことだ。でも、真中にいらっしやる方はちがうんだ。口を慎め」

と。そして、

「イエスさま、最後の最後にあなたさまと一緒できたことを私は本当にうれ

しいです。こんなやつがそばに居ったというご縁を覚えてください」

と言ったら、

「なんじ、今日、われと共に。パラダイス」

と仰ったではないですか。

まあ、なるほど、十字架上の盗賊はまだ生きていましたから、自覚もありましたから、言葉もしゃべれました。けれども、犠牲になつて身体を失った人だつて、霊は生きています。霊は自覚を持つはずですよ。

いや、そのことをみな知っているから、ああやつてお経を称えたりとか、回向えこうをしたりとか、黙禱したりとか、やっているわけですよ、日本人は。慰霊祭というのを本気でやっている。あれを信じないでやつたら、偽善者ですね。

「皆さん、黙禱してください」

と言う。これは宗教行為ですよ。それは、

「どんな方々も我々の黙禱、執り成しの祈りによって浮かばれるであろう」

ということを暗黙裡あんもくりに受けとっているから、それをやるわけです。犠牲になった、事故があつた場所へ花束を供えたりとか、いろんなことで何か霊を慰めるということを日本人はやっているんですね。

その本当の意味は何なのかというと、私は、キリストがその人々の所へダイレクトに行つてくださる。救急車以上にサツと行つてくださつて、霊を抱きかかえて天界へ導いてくださる。私は、キリストはそういう方だと思つている。

私がなぜ、こんなことを強調するかといいますと、今から五十年ほど前、私がクリスチャンになつてまもなく、北欧系の宣教師の説教を教会で聞いていた。まだ若い女性の宣教師でしたが、その方が住んでいるお隣にお婆さんが住んでおられた。

「昨日、お隣のお婆さんが亡くなりました。その人はクリスチャンではありませんでした。お気の毒です、あの人は地獄へ行きました。私たちは幸せですね、天国へ行けるんですから」



と。私はその話を聞いた時に本当にショックでした。そのようにしかものごとを見ること
ができない。それは黙示録を見たら、

「信じない者はどうだこうだ」

と、審きのことが出てますよね。表面的には審きのことが出てます。

「信ずる者はみな救われる。信じない者は呪われる」

とか。それをそのまま額面通りに受けとって、当たり前前の顔をなさっているという、その
神経に私はついていけなかった。だから、私はもう外国の宣教師の言うことは聞かないと
決めた。日本人は日本人の心で本当のキリストの心を探ろうと思った。

皆さん、いかがですか？ 自分のご先祖にせよ、親しい人にせよ、なるほど、キリスト
のことはご存じなかった。あるいは、キリストを一応は受けとっていらつしやらなかった。
けれども、

「未来永劫にそうだ」

なんて、誰も言えないですもの。

パウロはユダヤ人のために、

「私はたとえキリストに呪われても、キリストに捨てられても、おのが民族たるユ

ダヤ人が救われて神のためになることを本当に願う」

ということを、ローマ書9章から11章にかけて切々と語っています。迫害する同胞のため
にパウロは祈っている。これが本当の愛のこころではないかと思うんです。

キリストのような愛そのものでありたもうお方は、地獄で苦しんでいる霊たちをそのま
ま放っておかれるはずがないというのが私の信仰です。それは皆さまお一人おひとりご自
由ですから。

「そんなものは何の根拠もない」

と仰れば、それまでだけれど、私はそれ以外には考えられない。

●永遠の生命

このプリントへ戻っていただきましょうかね。

《キリストは復活という事実をもって、肉体の死をもって終わらない命、「永遠
の生命」^{いのち}を現した。

キリストの復活とは、肉体が生き返ったということではなく、イエスという方
の内にある霊的生命が、超自然的な、霊の体をもって甦れた、という出来事であ
った。

しかも、そのような、肉体の死をもつては終わらない「永遠の生命」と同質の「生
命」を私たち一人ひとりに、それを願う者には例外なく与えることを、キリスト
は願われた。ここに、私たちの希望がある。希望の揺るがぬ土台がある。



ヨハネによる福音書の第11章に、イエスが死んだラザロを甦らされる場面が描かれていますが、

キリストがラザロの墓の前で祈って、

「ラザロよ、出てこい！」

と言って、甦らされるんですけれども、その前にまずマルタにお会いになる。そのあとマリアにお会いになる。マルタもマリアも、ラザロが死んでしまったのでとても悲しんでいた。マルタは、

「終りの時の甦りは信じています」

と言った。でも、「終りの時の甦り」は遠い遠い先のことです。今、自分の兄弟のラザロが死んでいる。その事実を前にして何の慰めにもならない。

「あなたがここに居てくたされれば、ラザロは死なないですんだんです」

と、恨みごとを言うわけです。それに対して、その前にイエスが姉妹のマルタに力強く宣言された言葉、

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも決して死ぬことはない。」

「終りの時ではない。今だ

と言って、ラザロを事実、復活させられた。しかし、あのラザロの復活は元の身体に戻っただけです。それ以上ではない。私たちがいたたく復活という事態は、霊体を賜るという、質的転換をとげる、変貌するんです。それがローマ書なんかでうたわれている栄光の姿なんです。私たちが身体の贖われんことを」と書いてあります、その事態です。

私たちは、肉の体を脱ぎ捨てると、直ちに、霊界において、光り輝くキリストにお会いすることができるのである。》

これが我々の希望です。また、そういう希望があるから、この現世をしつかり生きようという、そういう意欲が湧くんです。

●信仰・希望・愛

さきほどの震災の話ですね、ペテロのお話を先に話してしまいましたが、

《これは、何もノアの時代の人々のことだけではなく、今日に至るまで、救いを必要とするすべての霊たちについて当てはまることだと、私は解している。万人を救済しようとの願いをお持ちのキリストならば、そうであるに違いないと私は確信している。》

6. 私たちの求めるべきもの。

では、私たち地上に生きる者の求めるべきものは何か。それは、私たちを、本当の幸せに導くのか。それは、誰でもが得られるものなのか。》



それは誰でもが得られるものでなければいけません。そういうものなのか。それに対して、私はやはり、「信仰・希望・愛」という事態、これをあげたいと思います。

使徒パウロの「コリント信徒への第一の手紙」第13章の有名な「愛の讃歌」から。

「愛は寛容であり、愛は情け深い……」

というところから始まって、その最後のところに、

「愛はすべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」

と。そして、しめくくりのところまで、

「信仰と希望と愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」

と。こういうふううたに謳われています。「信仰と希望と愛」と、三つ並べていますけれども、さきほどの、「愛は」というところの、「すべてを忍び、すべてを信じ」という、「信じ抜く」というのがひとつの信仰でしょ。「すべてを望む」、これは希望のぞみでしょ。そして、「すべてに耐える」。だから、愛の中に実は一切が含まれているんです。だから、プリントの次に書いてますように、

《愛のすがたは、「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

という。この愛のすがたは、実は、キリストの私たちに対するすがた、ではないか。

この愛のすがたは実は——キリストさまが私たちに対していていらつしやる思い、私たちに対する対し方——これはキリストなんです。この「愛はすべてを信じ」とか書いてますのは、「キリストは」と置き換えていただいたら一番はつきりします。

私たちのことを、どこまでも信じ抜き、望み抜く。そして私たちを担い抜く。どんなことがあってもへこたれない。そういう貫きの愛がここに謳われている。その愛に触れ、圧倒されて、こちらも、同じ質の人間に変えられていく。そんな風に思う。私たちの人間関係、社会の在り方もそういう質のものでありたい。》

私たちの人間関係——家族、あるいは隣人、学校、その他職場、社会、隣組だとか町内会だとか、いろいろあるんですが——そういった人間関係、社会の在り方もこういう姿でキリストが、

「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」

という、そういう姿で対されたように、我々一人びとりがそういうふうな人間に変えられておれば、そうしたら、世の中は変わるはずなんです。

●キリストに身をゆだねて進む

次の頁ですね、

《考えてみてほしい。およそ、この世の中のことは、すべて不安定なもので、何かを信じていないと前へ進めない。》



「何かを信じていないと生きていけないではないですか」と、これはヒルティが言っている。「人間というのは、誰でも何かを信じて生きている。およそ何も信じないで生きている人なんていない」

「そういうことをヒルティは『幸福論』の中で言っています。」

そんな中で、「私は道である、まことである、命である」と宣言してくださいさるキリストにこの身をゆだねて歩むこと、これが、私たちの側での、キリストを信じて進むということだ。》

「我は道なり、真理なり、生命なり」

とキリストは言われました。その方に身をゆだねて歩む。これが我々の側からいう、「信じて歩む」という姿だと思っている。だから、「キリストに身をゆだねて進む」という、そういう信、キリストへの信、これをくださるのがまたキリストご自身なんです。

「お前は私に付いて来るね、付いて来るだけの力を与えてやるから。付いて来る信仰をお前に上げるから。私を愛するよね、愛を上げるから」

という。なにか全部もらいものなんですよ、実は。皆さん、

「私は信仰があります。私は愛があります」

と、そんなことを手を挙げて言える人を私は信じないですよ(笑)。

「私は何もありません。私は本当にからっぽですよ」

と。空っぽの方がいいですよ。ゴタゴタあるのがもうじやまになるくらいで、

「神さま、私を本当に空っぽにして、充滿してくださいね」

というのが人間の思いではありませんでしょうか。だから、

《その「信」を下さるのもキリストだ。「望み」もまた、キリストが私たちの望

みの実体である、キリストにおいて望むことは、成就する。み心にかなう願い、望みは、成って行く。》

これはヨハネ福音書第15章7節です。ヒルティが、これは最高の言葉だと言っている。これが本ものになったら、我々は何も心配いらなないと。

「汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に隨いて求めよ、

然らば成らん。」(ヨハネ15・7)

「あなた方お一人おひとり私の中に宿っていないさ。私をお宿としなさい。そして、私の言葉があなたの中に生き生きと生きているならば——言葉は霊ですから——それが生きているなら、そういう状態の中で何でも望みがあれば、求めなさい。そうしたら、私が成し遂げてあげるから」

という。御意にかなう祈り、御意にかなう望みはかなえられるんです。

それが断絶していて、自分の勝手な思いで、

「今の入学試験は百点とらせてください。合格させてください。私は実はあまり勉



強してないんですけれども」

なんて、そんなのはだめですよ。御意にかなう、そういう祈り、願い、これは神さまの側でちゃんと成就してくださいなんです。そのことがここに言われています。

「7 汝ら我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に随いて求めよ、然らば成るべし。なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、而して汝等わが弟子とならん。9 父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。」(ヨハネ15・7-9)

と。ですから、キリストの中に我々は逃げ隠れをして、キリストに抱かれている。キリストの霊が私たちの中に宿ってくださいっている。そういう一心同体的な関係が成り立ってあれば、もう何も怖くない。しかも、それはキリストご自身の願いなんですね。

●試練と逃れの道

さつき、ヨハネ伝14章のところを申しましたが、その真ん中あたりのところに次のようなことが出てきます。

「私はあなた方を残して孤児にしない。必ず戻ってくるから。しばらくしたら、姿は見えなくなる。しかしながら、私は生きる。そして、あなた方も一緒に生きるんだ。その日には、私が父の中に居り、あなた方が私に居り、私がある。あなた方の中に居る。父と御子と私たちが一体になる。」

と。それからまた、23節にも、

「もし、私を愛するということならば、私の言葉を守りなさい。守るはずです。そうすると、父はその人を愛し、しかも、私たち、父なる神と私とはその人の所に行つて、住みかを共にする。一緒に暮らす」

と、そういうことを言っておられる。これはイエスがまだ地上にいらつしやる時ですから、「私は父のもとへ行つたら、父にお願いして、助け主、聖霊、真理の御霊をあなただ方の所へ遣そう」

というふうに他人事のように仰っているけれども、行つてしまわれたキリストは聖霊の姿で我々の中に宿りたもう。

だから、キリストはもう自分の為すべきことは全部為し遂げて、あとは私たちの中に宿るだけなんです。私たちに宿つて、そこから御業が始まっていく。キリストの愛の御業が始まって行くんです。一人ひとりにおいてです。そういう存在で我々はいらんですよ。でなかつたら、キリストは天上で手持ち無沙汰でね、本当にそうでしょ、働きがいがありませんでしょ。けれども、キリストは霊となつて、一人ひとりの中に宿つて、それを神の子にみなつくりあげて、そして神のわざをそこでなさるんです。この実に悲しみの絶えない、またある意味では残酷な地上でありながら、その中に神の子たちがキラキラキラ輝い



て、まばゆいばかりに闇の世に光り輝く。それをキリストは願っておられるんです。そのことのためにいろんな試練がやってくる。時には残酷と思われる試練まで訪れてくる。しかしながら、聖書をみますと、

「試練を恐れるな」

と書いてある。ヤコブ書(1・2)に、

「試練に遭えば、ひたすら喜びとせよ」

なんて書いてある。ペテロも、

「試練をたまわるのは、ちょうどいろいろな夾雑物さいようぶつが取り払われて純金じゆんぎんができあがるように、あなた方の信仰というものが鍛練たんれんされて、素晴らしい存在にさせられるために試練というものが訪れるんだ」

と、ペテロ第一の手紙で書いている(1・6、7)。だから、そういうふうにして、神さまの御意みこころというのはいろんな試練をたもうけれども、試練と共に必ず逃れの道を用意しておられる。コリント書にも出てます。

「あなた方を、耐え難い試練に出会わせるようなことは神さまはなさらない。

必ず試練と共に逃れの道のちを備えておられる」

と、そういうことも書かれています(コリント10・13)。

●原動力は聖霊という霊

だから、とにかく福音書にせよ、使徒たちの手紙にせよ、みんな励ましの手紙です。我々の地上は本当に涙の絶えない現実であるけれども、その中であつて雄々しく生きる、勇ましく生きるという、そういう生きる力をくださる。その原動力は聖霊という霊なんです。今のキリスト教がなぜだめかというところ、この聖霊のことを言わない。本当に言わない。私は「キリスト新聞」という新聞をとってますけれども、聖霊のことは出てこない。

聖霊のない信仰なんてものは気の抜けたビールみたいですよ(笑)。本当にそうですよ。何の力にもならない。単なる思想でしようね。思想ならこの世の人の方がはるかに賢いですよ。あるいは、思想、哲学という意味では仏教が最高かもしれません。向こうの世界は言わないで、この地上での生き方のさまざまな知恵に満ちているのが仏教だと思ふ。そういう感じがします。現代のお坊さんがどこまでそれを極めていくかは別問題です。でも、キリストの方は単純ですよ。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と。生き生きとした、生命なんです。知識ではないから、哲学ではないですから。学者は仏教が好きですよ、賢いから。賢そうなことが書いてあるから。

ところが、パウロは言っているでしょ、

「あなた方が選ばれたのは、学者をあざ笑うために、あえて愚かな者を選んだ。金



持ちを嘲るためにあえて貧乏人を選んだ。ろくでなしを選んだ」と書いてあるんですよ。それに対して憤慨している人はだめですね。

「はい、いかにもその通りです。こんな馬鹿者をよくぞ選んでくださいました」「そうだよ。馬鹿だから選んだよ。賢いやつはだめだ」

と。しかし、本当に賢い人はそうじゃないと思う。本当に賢い人は、自分がいかに何も知らないかということを知っているはずなんです。中途半端な賢いのが一番困る。しかも、人と比較して俺は賢いとうぬぼれていますから。

いやいや、もうこれ以上言わんでおきます。私も学者のはしくれでありますので。いや、賢いんです、回りの人はみんな。

本当にまあ、パウロも言ってますよ、

「我らは狂えるなり。キリストの愛が我らに迫れり」

と、そういうことを言っているでしょ(コリント二五・13〜14)。私もだんだん変になってきましたよ(笑)。

●生の喜びと、興奮をとまわらない熱情

さあ、プリントへまた戻りましょう。

《7. 聖霊・助け主・真理の御霊》

キリストが地上に来て下さった目的は、ひとえに、私たち、一人ひとりの中に宿って、一人ひとりを「天国人」にするため、「神の子」の実を与えるためであったといっても、過言ではない。

「ヨハネによる福音書」の第14章の中のキリストの約束。

「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。……あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。」

「その日には、わたしはわたしの父におり、あなたがたはわたしにおり、また、わたしがあなたがたにおることが、わかるであろう。」と。

『幸福論』や『眠られぬ夜のために』によって、日本においてもよく知られているカール・ヒルティは、その『幸福論(第三部)』の中で、このキリストの霊、愛の霊のことを次のように語っている。

まず、ヒルティは、もしも哲学というものが人を元気づけるならいいのだけれども、今はそんな哲学はないと言って、その当時の哲学のことを嘆いています。本来、哲学というのは、それに依り頼む人に常に新しい生命の泉となるようなものでなければいけないのに、それではなくなっていると言います。



ヒルティは、私たちの人生には、それに依り頼む人々にとり、常に新しい生命の泉となるような、「永遠にして滅びない、つねに変わらぬ霊的存在」が必要である、と言う。

そして、この「霊」「聖霊」が宿る結果として、次の三つのものが与えられる、と。第一に、何ともいいようのない生の喜び、つまり、人間やものごとに対する恐怖からの解放。普通では、これは誰にも得られないものだが、この霊が宿ると人間やものごとに対する恐怖から解放されて、何とも言いようのない命の喜び、生きていくことの喜びが湧いてくると。また、いろいろな心配事が無くなるのだと。

こう言ってます。これは今でもあてはまると思います。それから第二として、これも私とはとても気に入っているんですよ。

第二に、興奮をとまなわれない、一種の火のような熱情と生气であり、これもまたほかの道では求めても得られないものだ、という。》

この「興奮をとまなわれない」というのが大事です。よく、熱狂的な宗教家というのがおるでしょ。ウワァーッとなつて、一時的に燃え上がって、人を巻き込んでいくような。そういうものはヒルティは信用しない。一時的な熱狂ではないと。しかしながら、ここにありますように、

「火のような熱情と生气がある」

と。しかも、「興奮していない」という。

私は今、興奮してまずでしようか。私というのはおとなしい静かな人間なんですよね。野球をする時だけは別だと言われますけれども(笑)。それ以外では私は本当に静かなおとなしい人間だと思われている。でも、私は静かではありませんけれども、これなんですよ、

「火のような熱情と生气をうちに秘めている」

つもりです。これはキリストさまに会って、いつのまにかこういうふうに変えられてしまいました。

●おかすべからざる権威

それから、三番目。これは当時の、ヒルティの百何十年前の社会を考えてください。階級社会です。すべてその所属階級によって決められていた。上の階級の人はいばっているし、下の階級の人はさげすまれている。ところが、

《第三は、人間に対する力。世の中で特別の地位に立たない人でも、自ずと、個人として権威が備わる。そして、その人からは、何か生氣があふれ出て、他の誰にも従わない人たちさえも、この人にはよろこんで従うものである、と。》

そういうことになる、と言う。これはいいですね。地位だとか、そういう肩書によって人を従わせるのではなくて、その人に備わっている、おかすべからざるある権威、しかも、そ



れが慕わしいということ、つむじの曲がった人でも、この人にはついて行こうという気になるよ、と言う。これがやはり聖霊という方の働きだという。

この三つ。だから、皆さんも、この三つが伴ってくれば、

「ああ、聖霊が自分をそのような人間に変えつつあったらもうのだ」

と。それは自分ではわかりませんよ、聖霊が来ているか来ていないかなんて。

よくね、聖霊を受けて、異言が出てきたとか、身体がしびれたとか、手を置いたら病人が癒いされたとか、そういう現象が伴う人はそれを証拠として、

「聖霊をいただきます」

ということが言えるかもしれないが、私は何もないですよ。本当に何もない。だから、十数年、あるいはもつと悩んできました。

「私は聖霊をいただいているんだろうか。私は聖霊の器なんて言えるんだろうか」

と。私の恩師の小池先生は集会で、

「私はなんでここに立って話しているか。聖霊をいただいているからだ」

と、はつきり言われるんです。

「聖霊の来てない人はここに立てない」

と。私は集会で司会をするでしょ。辛くて辛くてね。いや、実際、先生ははつきりと聖霊を自覚しておられた。私はそれが無いものだから、永いこと悩んでいて、ある日、先生にとうとう聞いた。

「先生、私は聖霊を本当に受けているんでしょうか？」

「お前は受けているよ。受けてないなんて承知せんよ」

なんて、はつきり仰つたんです。「証拠は？」と、そこまでは聞きませんでしたけれども。

だから、人それぞれなんです。人それぞれで、聖霊というお方は、人それぞれの器に応じて、優しく宿る方もあれば、パウロに起こったように激しく劇的に臨まれる。まあ、いろいろありますからね。

異言が伴わなければ聖霊が来てないだとか、これこれの徴しるしが伴わないとだめだとか、そういうものではなくて、本当に聖霊はその人を愛の人に变える。さつき、

「愛はすべてを信じ、すべてを望み……」

とありましたね。キリストの姿です。つまり、その人をキリストの心に、キリストの心を心とする人に変えていく。その人を内面的にキリストの似姿に変えていく。

●心の平安

ヒルティはこの三つが備わると言っています。だから、とにかく、平安ですね、平安がある。将来に対する心配がなくなってくる。もうお任せ。委ねていく。地上で起こることはどんなことも、そのまま受け入れるんです。変なことがあると、



「信仰がないから」

なんて絶対に思わない。病気が来ようが、何があるうが、どんなことに遭おうとも、絶対にそれで揺るがない。びくともしない。出来事によって一喜一憂していたら危ないです。

そうじゃなくて、もう宿つてしまつていらつしやるんだから、その方と運命共同体なんだから。もう行くところは向こうの光輝くところに決まつているんだから。そうすると、地上であと何年あるうが、そこでの私の為すべきことは、キリストの心を心として、私を必要とする方の所へどこへでも飛んで行つて、その人と一緒に涙し、祈り、お助けするといふ、お手伝いするといふ、そういうことですね。

学者になろうとして勉強している人には、学者の勉強も大事だけれども、これも導いてくださるのはキリストだから、

「学者になるためにキリストを信じてはいかんなんて、そんなことを思つてはいかんよ」

と、よく言つてあげてほしい。私の恩師は立派な方でしたが、

「学者になろうと思つたら、無宗教でありなさい」

と言われたんですね。ということは、学問の世界に宗教を持ち込んだらいかんということを抑りたかつたんだと思います。

小池辰雄先生は、

「キリストにとらわれたら、物事にとらわれなくなる。キリストにとらわれる前は、物事にとらわれる、人にとらわれる、いろんなことにとらわれる。己にとらわれる。

キリストにとらわれると、自分というものから解放されて、すべてがあまりのままに見えてくる。曇りなき目で物事を見ることが出来る。知恵をいただく。」

と言われた。だから、私はうれしかったんですよ。「これだ」と思った。

そして、ひたすらその道を歩んできたなら、今度は、その恩師は私より後輩の弟子に何と仰つたか。

「奥田君のようなのがやはりいいんだらうね。心の平安があるから」

と。「無宗教でありなさい」と言つた恩師がですよ、「奥田君のような姿がいいんだよね」と、弟子に、孫弟子になるような人たちに仰るんですから、やはり先生は私に対する見方が変わったんでしょね。

「なら、先生は信じてくれますか」

と言つと、

「わしはいらん」

と仰つているから、まあしょうがないけれども。

やはり、人それぞれ地上で使命があります。私は学者になつてありがたいと思うのは、キリストは、



「我は道なり、真理なり、生命なり」

と仰ったでしょ。キリストを信じて歩む道と、学者として本当のことを求めて歩む道が衝突しないということ。ディメンション(次元)が違うんです。学問の世界では地上のことをやっています。社会科学は人間社会を対象とします。その人間社会はさまざまの人の集まりでできあがっている。そういう中での法律というのは、神さまの法律ではレベルが高すぎてとても現実の人間社会を律しきれない。だから、誰でもが納得できるレベルの法を捜し出していかなければいけないわけです。そんなところに、

「色情をいだきて女性を見るものは既に心うち^{こころ}に姦淫したるなり」

なんて、持ち込めばなら、とてもやりきれないですよ。

私は法律の方ですけれども、とにかく、人間社会の中のいろんな法則を探し出しているのではないかと思う。経済学は経済学のまた法則があるんでしょう。自然科学は自然科学で。つまり、この地球、宇宙の法則をそれぞれ探求しているのが学問だと思います。

●「私は何もできない。何も知らない」

ところが、神さまの世界はそれをはるかに超えて、次元が違う。どんなに地球が大きい、宇宙が大きいと言っても、それよりもまだ大きい世界の主^{ぬし}が神さまなんですよ。こんなものを捕まえられるはずがない。わかるとしたら、そこから出てくる啓示の光によつてです。その啓示の光に照らされて初めて、

「はあ、そうですか、私は知るべきことを何も知りません」

というのが本当だと思っんです。神さまの世界のことを100%知っていたのはキリストだけです。そのキリストが、

「私は何もできない。何も知らない。全部、父が示してくださいる通りのことを私はあなた方に語っているだけだ」

と仰った。そうなんですよ、キリストはスピーカーなんです。全部、上から流れてきて出て行くだけ。癒しの力も、預言の内容も全部、上から流れてくる。それをそのまま告白しておられる。だから、キリストは無責任です。神さまがすべての責任をとりたもうんです。そういう姿でキリストはいらっしゃった。ましてや、我々はそのキリストの前に自分をサムシング(何者か)なんか絶対にできっこありません。キリストの中に知恵も、知識も、あらゆるものももう満ち満ちている。その光を私たちはいただいて、生命をいただいて、希望をいただいて、それで生きていくという、そういう存在であるわけです。

では、この聖霊を受けるには何が必要かということヒルティが言っています。

《そして、この霊を受けるために必要なことは、

「真理を見いだして、それに従おうとする真剣な熱望、真実の決意」があれば、それで十分であり、「どんな捧げ物も祭司もいらぬ。ひたすら神に、心を向ける



「こと以外にどのような行為も必要でない。」という。《
「献げ物」というのは、献金だとか、いろんな寄進をするとか、宗教的なそういう献げ物です。
「祭司」というのはお坊さんです。仲介者がいるかというのと、いらぬ。ひたすら神に心を
向けること。一人の人間として、一人の魂の存在として、

「神は霊なれば、拜する者も霊と真をもつて拜すべきなり」（ヨハネ4・24）

と、サマリヤの女に対してキリストは言われました。そのように、神さまは一人ひとり
尊い人格としておつくりくださっているんだから、その尊い人格の中心は霊ですから、そ
の全身全霊で心を神さまに向ける、キリストに向ける——キリストは神さまの出店、出張
所ですから——その出張所のキリストに自分の心に向ける。それがピシャとピントが合
ますと、そこへ流れこんでくる。それ以外は何もいらぬ。私はその通りだと思っています。
これは革命的な宣言ですよ。いわゆる教会制度とか、祭司の制度とか、カトリックのヒエ
ラルヒー（位階制度）とか、そういうものに対してのもの、凄いこれは革命的な宣言です。だから、
ヒルティは教会の人たちからは毛嫌いされる。つまり、ヒルティはある種の宗教改革をやっ
ているんです。本ものであれと言う。そう私は思います。

●「それでも私は、今日、私のリンゴの苗木を植える」
次に参りますと、

《8. 地上での生き方、この世での責務

地上のさまざまな価値あるものにとらわれることなく、「天なるもの」、「見えな
いもの」に目を注ぐということは、決して、この世のことはどうでもいい、無価
値である、などということではない。

永遠なるもの、真の実在界の存在に目覚めることによって、かえって、この地
上でのさまざまな営み、責任を立派に果たそうという意欲と悦びが湧く。

決して、祈り三昧とか、偏った宗教的生活に埋没することはあり得ない。》

ヒルティは非常に仕事というものを大事にします。

「幸福とは神の傍らかたわらにあつて神さまから賜った仕事をやりぬくことである」

と、そういうふう言っている。もちろん、チャップリンが言ってますようなあいつた
機械化された時代の前の段階ですからね。でも、本当にそういう創造的な仕事、自分の手
を動かし身体を動かして何かを作りあげていく、その一こまでもいいんですけれども、そ
れが本当に役立つという、そういう仕事の悦びというものを持たなくてはいかん
ということ強調した方なんです。

そして、ルターの言葉をここに引きました。

《マルティン・ルターの言葉。》

「たとえ明日、この世界が滅亡すると知ったとしても、それでも、わたしは、今日、



わたしのリンゴの苗木を植える。」
これは有名な言葉なんですね。

「明日、もうこの地上が滅亡するのに、今、リンゴの木を植えて、何になるのか」というのが普通の見方でしょうけれども、ルターはこんなことを言う。

このルターの言葉は、永遠の实在界に魂が生きているからこそ、この世の使命を存分に果たし、何が来ようとも、動じないという心意気を表している。》

永遠の实在界に魂が生きているからこそ、この世の使命を——たとえ明日、終りが来ようとも、また何日か、あるいは何年後か、そんなことは我々は知らない。いつ終りが来ようと、これは自分の生命もそうです。地球もそうです。見える世界もそうです。自分の生命そのものもそうです。いつ終りが来るか、これは誰にもわからない。けれども、それがいつであらうとも——今日為すべきこと、今日私のすべきことはこれだということをしっかりと自覚できれば、それに没頭する。そういう本当の落ち着きというかな、それが得られるんですね。何が来ようとも動じない。

●「やがて死ぬ気色も見えず蝉の声」

夏になると、せみが「シャンシャン、シャンシャン」と鳴くんです、アブラゼミ、クマゼミがね。芭蕉の歌がありましたね、

「やがて死ぬ気色も見えず蝉の声」

と。せみの地上の命は一週間ほどなんです。地中では永い間過ごすんですよ。そして地上に出てきて、カラを破って出てきて、朝方からシャンシャン、シャンシャン鳴いている。「やがて死ぬ気色も見えず蝉の声」という、

「儂いなあ」

という思いがいたしました。でも、私は今だったら、そう思いませぬね。

「よくぞ鳴いているぞ、それがお前の生き方だ。お前は使命を終えたら天上に迎えられるぞ」

と、そう言ってやりたい。せみは、なきがらは地上に落ちるでしょう。でも、せみの魂は天に迎えられる。

「精いつぱい鳴け」

と、そう言ってやりたいんです。これは我々、地上で生きる人間すべてについて言えるのではないでしょう。

結果にとらわれない。夏になれば甲子園。優勝するのはたった一校なんです。一回戦で敗退するのもしれば、予選で敗退するのもある。したら、それまで営々とやってきたのは全く無駄なのか。私は決してそう思わない。もし、それを無駄だと思えば、もうやめなさいと言いたい。日々練習しているそのことの中に価値がある。そのことに喜びがある。



そういう練習、生きざまをやりなさいと言いたい。これは受験勉強でも何でもそうです。ある結果がでなければ負けだ、ある結果がでたら勝ちだという、そういう生き方はもうしたくないですね。

プロセスに意味がある。我々人間はプロセスなんです、生きていくというプロセス。我々の終着点は天国です、キリストのところなんです。その地上で何らかの使命を賜って、地味なその日その日を精いっぱい、キリストを讃えながら、湧いてくる喜びに感激しながら、一生懸命やっていく。そして、誰かが喜んでくれたら、非常にうれしい。日本の国というのが、そういう生き方に変わって行つてほしいんですね、私は。

●愛に根差した生き方

では、最後の方に行きます。

《9. 最大なるものは「愛」》

パウロは、「信仰と希望と愛、この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である。」と「愛」の大切さを教えた。ヒルティも、「愛は一切に勝つ」(Amor omnia vincit) と、「愛」が最大の力であると、力説した。使徒ヨハネは、その「第一の手紙」において、「愛」のことを次のように語っている。

長い文章ですので、要点だけをここに書きました。

「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださった。そのことによって、わたしたちは愛ということを知った。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきである」

「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見て心を閉ざすような者には、神の愛は宿らない。だから、言葉や口先だけではなく、行いをもって愛を實踐しよう」

と。こういうことをヨハネ第一の手紙の中で訴えています。そして、私の震災に対する感想を以下に書きました。

この度の大地震を契機として、日本国中の人たちが、被災された方々の苦しみや窮乏をわがこととして受け取り、何とかして、少しでも、力になりたい、助け合いたい、との熱い思いで、さまざまな方法で、その思いを現実に見える形で現しておられることに、私は深い感銘を受けている。

今まで埋もれていた、眠っていた大切なものが、呼び覚まされた、人間としての原点へと回帰させられたとの思いを抱いている。

神様は、人を「ご覧になるとき、その人の「宗教」が何であるかによってではなく、その人の生き方が「真実の生き方」であるかどうか、自己中心的な生き方ではなく、愛に根差した生き方であるかどうか、を見ておられると、私は信じている。



無私の心で尽しておられる方々に、そして、苦難の中で懸命に生き抜こうとなさっている方々に、神のご加護と祝福が豊かでありますようにと、心からお祈りいたします。

最後に、キリストは、地上に生きる私たち一人ひとりの中に、誰でも、心から願えば、宿ってくださる、無条件に来てくださるということをし、ぜひ、知っていただきたいと願う。

私は、このお方のことを、「キリスト教」という「一つの宗教」の枠の中に閉じ込めてほしくない、と願っている。

自然界の太陽が、悠久の昔から、この地球に光と熱と命を与え続けてきたように、霊界の実在者にして愛の権化、永遠の生命であるキリストは、地上の生きとし生ける者一切に光と愛を、そして霊の命を与えて止まないお方である。

日本のみならず、世界の人々が、この事実気づいてくださるようにと願ってやまない。》

●根源的基盤は何か

更にちよつと付け加えさせていただきますと、キリストの言葉に次のような言葉があります。ルカ伝の6章46節から49節、口語訳で読んでみますと、

「⁴⁶わたしを主よ、主よ、と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか。

⁴⁷わたしのもとにきて、わたしの言葉を聞いて行う者が、何に似ているか、あなたがたに教えよう。⁴⁸それは、地を深く掘り、岩の上に土台をすえて家を建てる人に似ている。洪水が出て激流がその家に押し寄せてきても、それを揺り動かすことはできない。よく建ててあるからである。⁴⁹しかし聞いても行わない人は、土台なしで、土の上に家を建てた人に似ている。激流がその家に押し寄せてきたら、たちまち倒れてしまい、その被害は大きいのである。」(ル

カ6・46〜49)

地を深く掘って岩の上に基をすえた人。我々の住んでいるこの地上の世界というもの——始めに申しました文化文明、人の生活です。さまざまな活動、経済活動、生産活動、あるいは家族生活万般です——その根源的基盤は何か。

根源的基盤があつて、その上に築かれるものならばいいけれども、根源的基盤なしにただ上部構造を築いていきますと、激流が押し寄せてくると、たちまち倒れてしまいます。しかしながら、深く深く掘り下げて、岩盤、固い岩を土台として、その上に築きあげていく、そういうものであるならば、ちよつとやそつとではびくともしないという、そういうことをここでは言っているんです。

「地を深く掘り」ということは、見えない世界です。いつか私が『樹木の幹と根』というエッ



セイを書いたことがあります。

「樹木は、上に高くそして横に広くひろがっていく大木というものは必ず、根を深く掘り下げて、地中深く水脈につながっている。だからこそ、根がしっかりしているから、上が榮えていく。もしも、根がなければたちまち枯れてしまう」というようなことを書きました。根つこの世界は見えない世界だと。つまり、

「神は霊であるから、拝する者も霊とまことをもって拝せよ」

という、霊なる世界です。神さまの世界。そこへ、それを目指して求めて行くというのが、この「地を深く掘り」ということだと思います。

「岩の上に」というのは、キリストです。キリストという揺るがぬ土台、この上に基を据え、生活の基盤として生活を建てあげていく。そうしますと、人の営む営みがすべて祝福されて揺るがないものになる。もし、そういうものが全体に行きわたるならば、たとえ大震災が来ても、びくともしない。直ちに神の国に迎えられる。そういうふう思うんです。

●「なんじ、一つを欠く」

ですから、日本ではなかなかこういうキリストの福音というものは根付きにくい、伝わりにくい。それが本当に私はくやしいんです。明治以来ずっと入って来ているのに、どうしてこれを拒んで受け入れないんだろうかと。私は、知識人の罪は重いと思う。正直言つて、旧約聖書や新約聖書を普通の人に読めと言ったって無理です。誰かが分かりやすく解説してくれなければ無理ですよ。やはり、頭のいいエリートたちが真剣にこれに取っ組んで、だめならだめ、いいならいいとはつきりしてほしい。ところが、無関心です。これが私はくやしいんですよ、本当に頭のいい方々が取っ組んでくれなければ。

皆さん、そう思われませんか。

「知識、知識、知識。勉強、勉強、勉強。詰め込み……」

なんて、そういうふうなものは根のない上を建てあげているように見えてしょうがない。浅薄なんです。一時的なんです。そうじゃなくて、千年も続くようなものを築き上げようではないかと。

私は、仏教は、聖徳太子は立派だと思う。その他本当に素晴らしいお坊さんがいらっしやる。そちらの方はそちらの方で頑張っていたんだけど、やはり、近代におきましては、現代におきましては、この本当のキリストというのは、すごい——エネルギーというのか、何というのか、霊的生命というのか——これだけは無くならないというマグマみたいなものですよ、キリストさまって。これが爆発して、本当の生産的な世界をつくりあげてほしい。喜びの世界、生命の世界、愛の世界、これを築きあげてほしい。

それをチマチマと、核の抑制のために1500発までは認めようとか認めないとか、もうなんだか国際政治でも実にくだらないうことにお金を注ぎ込んでいます。握手しながら腹の



中ではピストルを構えているわけです。これが国際社会でしょ、本当のところ。大国がとにかく牛耳ぎゅうじっていますから。後進国はせつせつと森を伐採したりなんかして、地球環境を害することばかりやってきている。それに対してなんら有効な手を打たないで、温暖化だとか何だとか、地球はもう自然界からも滅びに向かっているわけでしょ。

そういうなかで、なぜ、本当の根源の根源に帰って、そこからもう一度、リコンストラクト、建て直そうじゃないかという叫び声をあげてくれないのか。テレビを見ましても何を見ましても、どのように復興計画をするか、どういう都会を造ればいいかとか。それは上の部分は大事ですよ、もう一度いいものを造りあげるのは。津波が来てもびくともしない、そういったものを造りあげるのは大事ですけれども、もつと根というか、地中に深く掘りさげてという、そのことを叫んでくれないんです。それを私は叫びたいんですよ。

震災に遭って、誰でもができることをして、将来のため、あるいは苦しんでいる人のために寄与しようという気持ちはみんな持っている。何をすればいいか、ボランティアも、みんな尊い。けれども、それプラス、私が叫んでいるようなことを本当にクリスチャンの方々が、目覚めた方々が叫んでほしいんです。でなければ、

「なんじ、一つを欠く」

ということになってしまふ、仮に素晴らしい復興ができあがりましても。というのが私の嘆きの言葉なんです。

皆さん、どうぞ、ここにいらつしやる若い方々は、本当に共感して、興奮を伴わない熱狂というか、熱中というか、そういう魂になつてほしい。本当に私はそういう魂がこれらの日本を導いて行くんだと信じています。それでなければ、同じことの繰り返しです。

なにか、愚痴っぽくなつてしまつてすみませんが。では、これで終わることといたします。どうも、ご静聴ありがとうございました。

●祈り

では、祈ります。

主イエス・キリストさま、今日は諸所方々から、またいろんなポジションの方をここに招きくださって、ありがとうございます。

あの震災以来、本当にこの僕をとらえて放さない最大の関心事を今日、告白することができます。この世の人たちには決して喜ばれない内容です。しかしながら、本当にあなたが呻いておられる、そのことを思いますと、あなたの霊の呻きをいただきますと、私もまた共に呻かざるをえません。そして、本当の望みをいただいて、前に向かって進みたく思います。

「御霊みたま、言い難き呻きもて執り成し給うなり。召されたる者には、一切のこと

があい働きて益となつて行く」



と、そのように約束されています。どうか、この日本の人々の中に、また居住しておられる外国の人々の中に、あなたこそが生命の生命であり、希望の源であることを、どうぞ、お示しくくださいますように。人の智慧によってではなく、あなたのお智慧によって、あなたの啓示によって、人の心を、魂を照らしてくださいますようにお願い申し上げます。

今日来ることのできなかつた人も、どうか、録音を通して、またラジオ放送を通してこのメッセージに触れていただきますようにこいねが希ねがいたてまつります。

感謝と讃美と祈りを兄弟姉妹のそれと合わせ、主イエス・キリストの尊き御名を通して御前にお献げいたします。アーメン！

（小冊子『試練の中での希望』2011年10月15日発行より転載）

